

小説

桂

春

田

治

長谷川幸延

長谷川幸延

桂春園治

小説
桂春団治



昭和三十七年五月十日 初版発行

定価 三五〇円

著者 長谷川幸延

発行者 角川源義

印刷者 菅生定祥

製本者 小高啓三

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番
電話九段(31)〇一一一〇一一五

三協美術印刷・小高製本 落丁・乱丁本はお取替えいたします

小説 桂 春団治

装
幀

佐
野
繁
次
郎

第一章

「嬢^{ぢやう}さん。嬢^{ぢやう}さんは、わてが好きやないんでっか」

「……………」

「あんたかて、もう十一やないか。わてと三つ違いや。男の十四と、女の十一とでは、女の方が早熟^{まき}てんならんはずやないか。嬢^{ぢやう}さん、あんた、わてが好きか」

「……………」

「ええ、好きやないのか」

「……………」

丁稚^{でうち}の藤吉に、そうたたみかけて顔をのぞきこまれても、小学校のまだ三年の、それも小柄^{こがら}で少しおくての千代子^{ちよこ}は、なんと返事をしていいか、ぼんやりと藤吉の顔を見上げるばかりだ。

「嬢^{ぢやう}さん。なんとかいうたんはなれ」

丁稚の藤吉は、もどかしそうに、お千代の肩に手をかけて何度も大きく揺すりつづけた。陽あたりのいい土蔵の横、大きく南の御堂さんの屋根が、その土蔵へ影を落しているのが、いかにも大阪の船場の商家の裏庭らしい。戸外から、店の間、中玄関、台所を、ずっと一筋に通っている通り庭。これも大阪特有の建築法だが、そのずっと奥に、裏庭があり、そこに土蔵や、井戸端がある。昔ながらの船場の匂いである。

藤吉は、その時十四だったが、早生まれで十三の歳に小学校を出ると、きんから革屋の職人である父の藤助がある父の藤助が

「人間は、他人の飯食わんと出世せん」

「そうかて、学校出たばかりやのんに、しばらくは……」

骨休めに、遊ばせてやれという母親の涙ながらの思いやりも

「阿呆。そんな甘いことでどうなる。可愛い子には旅をさせ、じゃ」

と、すぐ奉公に出された。大阪道頓堀を東へ二丁、二つ井戸で有名な粟おこし屋に近い露地の中に、川田藤助は逼塞して、昔は表通りの店で四、五人の人も使っていたきんから革の職を、自分一人で細工しながら、ほそぼそと生きていた。酒をのむので、いつも手許は苦しく、口では強く

「可愛い子には旅をさせ、じゃ」

といい切っても、内実は、口べらしのために出してやる奉公で、母親のおとときに

「あんたがお酒さえやめてくれたら、藤吉を出さんでも……」

「そんな、出来もせんことをいうな」

「出来るときめてかかっているねんさかい、困った人や。子供より、酒が可愛いのかいな」

「違うわい。藤吉は、寅の五寅じゃ。五寅といえは、日本一の強い星じゃ。一日に千里行つて千里戻るといふのが、この寅じゃ。外へ出してやらナ……」

と、おときを押えつけて奉公に出した。

五寅の寅。それは嘘ではない。が、一日に千里行つて千里戻るといふこの寅は、三日目に戻つて来た。最初の奉公先であつた高津の黒焼屋の隣の八百屋は

「こんな喋舌りの子は、どもならん」

と、つき返された。それから三月の間に五軒、転々として暇を出されたが、理由は皆、喋舌りすぎる、口が軽い、そのワリに尻が重い、という理由であつた。

が、それも縁のもので、六軒目にこの南久太郎町の「大磯」という古着屋は一年つづいた。古着屋といつても、大磯は本店である。それに藤吉の口軽が、お客への愛想にもなり、時にその頓智頓才は主人夫婦にもみとめられ、ある日、茶の間で

「藤吉が、このままスツと大きになったら、お千代の養子にちようどええねんが……」

「そうでんなア。実は私も、あの子の子柄がええし、弁もよう通るし、そない思うてましてん……」

藤吉は、廊下を歩いていて、藤吉が、という声に、ふと足をとめて聴耳を立てた。そして思わず胸をふくらませた。

（嬢うさんの養子——）

そして

（弁もよう通る……）

喋舌りすぎる、と、何処でも暇を出された。それがここでは、弁が通るといつてくれる。くらんだ胸が、切なく、涙がこぼれそうになった。たまらなくなつて、廊下を走つた。だから、その後で

「まあ、藤吉もまだ十四や。まだ早い、もう十年もしてからのことや」

「そうです。お千代もまだ十一です。十年早よおますなア」

「十年早い」

といったことを、聞きもらした。

藤吉は、その日からお千代を見る目が少し変つた。

（養子……）

早熟な、十四の藤吉を、その一ことが刺激した。藤吉の目に、昨日まで手も届かないところに咲いていた花が、蕾の花が、パツと開いて、手さえのばせばもぎとれそうに見えたのだ。

「嬢さん」

そして、それから三日目、土蔵の扉口に腰をかけて、少女画報を読んでいるお千代の、その横顔が急に女らしく見えたのである。

「嬢さん」

藤吉は、思わずお千代の手を握っていた。それまで学校への行き戻りのお供をしても、はるかうしろから、鞆かばんを持ってついて歩くだけで、手などふれたことさえない。その手を、思いきり握りしめたのだ。

「痛い」

まだ十一のお千代には、ただ痛いというだけしか感覚はない。幼くしかめたお千代の表情を、藤吉は

「嬢さん」

物足りなさそうに、肩を撫なむようにもう一度揺さぶった。

「あんた、わてが好きにならないかん」

「なんで」

「わては、養子や」

「養子て——」

「婿むこはんですがな」

「むこはん——」

「たよりないなア」

藤吉は、イライラした。幼いながらも女の軀からだである。そうはげしく揺すぶっているうちに、お千代の乳臭ちゆうくさい匂いが、藤吉の心をかき乱した。

「嬢とうさん」

両方の肩を抱くと、つよくそのまま引きよせた。

「何するのん」

さすがにお千代も、藤吉の、少年ながらもつきつめた眸ひとみに

「うち、厭いやや」

本能に突き離そうとした。が、藤吉は離さなかった。

「嬢とうさん。養子だっせ」

「藤とうどん。厭いやや」

「藤どんやない、婿はんや」

「……………」

「北山だけや」

藤吉の、分厚い唇が、お千代の唇を蓋するように迫った時である。

「この素丁稚め」

思いきり横びんを引っ叩かれ、それこそ目から火が出たような衝撃に

「あつ」

と、藤吉がひっくり返りながら見たのは、大磯の主人の、憤怒の形相であつた。

「子供のくせに、北山やと」

北山とは、古い大阪弁という接吻のことである。

「この素丁稚め。とつとと出て失せい」

「大将」

そら約束が違います、と、いおうとしたが、それより先に襟髪を掴まれ

「出て失せい」

と、引きずられながら、藤吉は

（こら、五黄の寅やのうて、野良猫がナ）

うら悲しかった。

世にも面白い男の一生……というキャッチ・フレーズで、後には大阪一の人気者になった桂春団治、本名川田藤吉は、生まれたその日から、すぐ警察の御厄介になるといふ、数奇な運命の下におかれた。

藤吉は、きんから革の職人川田藤助の厄年の子であつた。きんから革というのは、印伝の裏入といつて珍重された、その印伝革のことである。藤助は、そのきんから革の皺を引きのばしながら、さつき生まれたばかりの嬰兒を横目に見て

「おとき。厄年の子や、やっぱり捨兒せんならんなア」

まだ産褥にいる女房へ声をかけ、おときも屏風の向こうから

「嬰兒に、風邪ひかさんように捨てなはれや……」

と、応えた。厄年に生まれた子は、一たんは路傍に捨て、改めて拾つた子にして育てないと、子供も育たず、その家にも不時の災難があるといふ伝えられていた。藤助のところでも、いよいよ生まれるとなると、あらかじめ手配をして、同じ露地に住んでいて、高津湯という風呂屋の釜焚きをしている助次郎にたのんで、その夜、七時ごろに

「表通りの郵便箱の前に捨てるさかい、塩梅よう拾うてや」

「おっと合点、承知の助や」

と、約束した。

藤助は、産着を二枚きせ、黄色い巻蒲団にくるんで風邪をひかぬようにした嬰兒を、ソツと表通りの、郵便ポストの下へおいた。幸い人通りはない。家へ帰って、しばらく待ったが、なかなか助やんは来なかった。氣になって、ポストへ行ってみたが、もう助次郎が拾ったらしく、嬰兒の姿はなかった。

「あんた。助はん、まだでっか」

「まだや。けど、拾うてすぐ届けたんでは芝居氣がない。一廻りして、持って来よるねんやろ」

「えらい手がこんでるけど、ええかいナ」

さすがに夫婦が、ちょっと氣にした時である。

「ああ、えらい目に遭うた」

ブツブツ吹きながら、その助次郎が入って来た。が、見れば助次郎は、嬰兒を抱いていないのだ。藤助が、立ち上がって

「助やん。嬰兒は、嬰兒は」

「嬰兒——」

助次郎の方が、不服そうに

「なんぼ待っても、なんぼ待っても、嬰兒を捨てに来んやないか。待ちくたびれて、催促に来

たんや」

「なんやて」

藤助が、蒼あおくなつてつめよると、おときも屏風をかきのけて匍はい出して来た。

「もう一時間も前に持つて行つたがナ」

「けど、捨てに来こんがナ」

「何いうてるねん」

「藤やんこそ」

二人ふたりは、ちよつと揉もみ合つたが

「何処へ捨てたんや」

「郵便箱の前やがナ」

「エッ」

「何処で待つてたんや」

「郵便局の前やがナ」

「……………」

まだポストというよび方が普及せず、郵便箱といったのを、郵便局と間違えたのが、助次郎であつた。

「何処の世界に、わざわざ郵便局へ捨児に行く奴があるかい。小包やあるまいし……」

「ちつとでも早う届くやろ」

「それが、届いてないやないか」

押問答を、おときがハラハラして

「嬰兒は」

「さあ」

もうポストの根方にはいないのである。藤助はもとより、助次郎も真つ青になった。ふるふる足をふみしめて、外へ出た。

春とはいっても、どこか底冷えのする夜の街に、耳をすましても嬰兒の啼き声はしなかった。

助次郎が

「呼んでみいナ、大きい声で……」

「呼んだかて、生まれたての子に聞えるかい」

「そうか……」

「第一、まだ名前があるかいナ」

「ああ、なるほど」

三十分ほどさがしあぐねて、ボンヤリと二人が帰って来ると、おときがオロオロ声で

「あんだ。早う警察へ行きなはれ」

「警察て」

昨夜も博打で夜更ししている助次郎は、疵持つ脛をガクガクさせたが

「嬰兒が、警察へつれて行かれてますがナ」

「何」

「誰やらが、捨児やと交番へ届けてくれたんです。交番から警察へ廻ってます」

「生まれ立で警察のお世話かいナ。気の早い嬰兒や」

藤助と助次郎は、それからおそろおそろ所轄の高津警察署へ出頭した。男ばかりの警察だったが、それでも行平でミルクをあたため、心づくしの乳豆をくわえさせていたが

「君か、川田藤助というのは」

「へえ、お手数をかけまして……」

もみ手をして恐縮する藤助へ

「厄年やさかい捨児したと、よめはんがいうてたが、なんという古臭いことをする。こんな可愛らしい子、そのままつれて行かれたらどうする」

と、さんざん叱られて、やっと返して貰って外へ出た。外へ出て助次郎が

「藤やん。見てみ」